

教科書の特徴

教科書名 : Revised COMET English Communication II (104 数研 C II 104-903)

① 内容

- A. 学習者に親しみやすく、かつ、学習者の知的好奇心を満足させうる内容の題材を選んでいる。Lesson 5 (目標設定), Lesson 8 (ナッジ) は学習者の日常に関係する話題で取り組みやすく、Lesson 4 (デジタルデトックス), Lesson 10 (日本のサービス) は、身近なものから議論につながる題材である。さらに、Lesson 9 (アンパンマン) では、親しみのあるキャラクター・作品を通じて平和の大切さや生きる力について学び、Lesson 11 (アフリカに導入された置き薬) では、日本発祥のものを通して国際社会の問題について考えを深めることができる。また、Lesson 6 (未来の宮大工たち) や Lesson 12 (小さな工場から世界へ) のように、「自分もやればできる」という自己肯定感・自己効力感につながる、かつ進路や職業を意識できる題材も収録している。
- B. 題材内容を一方的に与えるだけでなく、学習者自身の意見を引き出したり、クラスメートに意見を聞いたりする活動を設けるなど、4技能5領域を統合的に関連させる活動を用意している。
- C. 言語材料に関しては、「英語コミュニケーション I」とのスムーズな連携を考慮して、必要に応じて再度扱うなど、確実に定着できるよう配慮している。
- D. 言語活動においては、具体的で身近な使用場面を設定したり、豊富な例を提示するなどして、学習者が積極的かつ無理なく授業に参加できるように配慮している。

② 構成・分量(単元の配列や特色・分量) :

- A. 本課は、導入から課末の問題まですべて見開きの構成となっていて、授業計画が立てやすい。
- B. レッソンの目標達成に向かって各活動がリンクしており、各活動を通じてトピックの理解を深めることができる。
1. 導入の見開きでは、扉に GOAL としてその課の到達目標を示し、右ページ上部で5領域別の目標を確認できる。Warm Up では、ピクチャー・ディクショナリーで GOAL 達成のための活動に使える語彙を補強できる。Say It! では、Warm Up で学んだ語句を英文の中で確認することで、使用のイメージを喚起し定着につながるよう工夫している。
 2. 本文の右ページは、Points to Check (代名詞が指す内容等の確認) ・Comprehension (本文の内容把握問題) ・What Do You Think? など(本文内容に関連した自己表現活動や調べ学習) となっており、本文を繰り返し活用して理解へと導く構成になっている。
 3. 課末の Hints for Understanding では、本文理解に必要な文法を CHECK の易しい演習問題で確認し、さらに TRY で実際に使ってみることで、文法の定着を図ることができる。
 4. Get More Information では、トピック関連のリスニング活動に取り組める。スクリプトは次ページの GOAL Activity の発表と同形式になっており、自身の発表活動をイメージすることができる。

5. GOAL Activity はレッスンの GOAL を達成するコミュニケーション活動となっており、ステップで段階的に取り組めるよう工夫されている。
- C. 本課は Lesson 3 までは 2 パート構成に抑え、読解量・英文レベルともに「英語コミュニケーション I」とのスムーズな連携に配慮している。
- D. 本課以外の活動につき、Activity として「論理パズル」「ファストフード店で注文」など、4 技能 5 領域を統合的に用いて、学習者が楽しみながら取り組める活動や実践的コミュニケーション力を養成できる活動を用意している。
- E. Lesson 12 のあとに Reading を収録しており、長期休暇の課題などに利用することができる。

③ 表記・表現 及び 使用上の便宜

- A. 新語は脚注ではなく傍注であるため、目の動きに沿って追うことができる。また、発音記号には、初学者が積極的に発音するきっかけとなる、カタカナによる発音表記を併記している。
- B. 課末の Hints for Understanding の文法解説ではイラストや図を多用しており、学習者が各文法事項の構造やそれが表すニュアンスを感覚的にとらえられるよう工夫している。
- C. 表現活動には全般的に TOOL BOX として豊富な例を提示し、学習者が無理なく取り組めるように配慮している。
- D. 内容に即したイラストや写真が多く、魅力ある紙面構成となっている。

④ その他

- A. 巻末 Word List には、本書で扱った語の品詞や名詞の可算・不可算、動詞の活用、形容詞の比較変化などを記している。利便性の向上とともに、語彙への関心を高める配慮となっている。
- B. 表現活動のサポートとして、巻末 TOOL BOX Plus に各課の活動で使える語彙を掲載している。
- C. 後ろ見返しには、動詞の不規則変化一覧を掲載しており、動詞の変化について基本的な理解が促進されるよう配慮している。